

## 痛みの経験は志向的か

小草 泰 (Yasushi Ogusa)  
日本学術振興会・慶應義塾大学

現在の知覚の哲学で主流となっている理論は一つの傾向を共有しているように思われる。それは、経験の質的で感覚的な側面を、センスデータやクオリアのような主観的で内的な存在者によってではなく、経験が表象（ないし提示）する経験から独立の世界のありようによって説明しようとする傾向である。しかし、このような考え方に対しては、痛みやその他の身体感覚が深刻な問題を提起するとしばしば指摘される。というのも、たとえば赤色を見る際の視覚経験の質的側面がまさに赤色という外的性質に訴えて説明されるということが、少なくとも一見したところもっともらしく感じられるのと対照的に、痛みの経験の質的側面が果たして経験から独立の世界に存在するいかなる存在者に訴えて説明されうるのか、明らかでないからである。

本発表は、この問題を主流理論の一つである「志向説」の主要ないくつかのバージョンに則して追及する。そして、それらのバージョンが志向説の枠組みのうちで痛みを十全に扱うことに成功していないことを示すつもりである。具体的には、まず、志向説の概略を簡単に説明したうえで、それに対して痛みがいかなる問題を提起するのかを明確にする。そして、この問題に答えようとする志向説の主要な三つのバージョンとして、[1] 痛みの経験が「非概念的 content」を持つことに訴えるマイケル・タイの理論、[2] 痛みの経験の内容は（主体の身体部位についての）独特の「与えられ方」を含むとするデイヴィッド・ベインの理論、[3] 志向的内容に加えて、内容を抱く仕方としての「志向的モード」を導入することで痛み経験を説明しようとするティム・クレインの理論をそれぞれ検討し、それらの問題点を指摘する予定である。